

令和 3 年 5 月 24 日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K16519

研究課題名（和文）アイルランド移民からみる近代スポーツの伝播

研究課題名（英文）The Spread of Modern Sports by Irish Immigrants

研究代表者

榎本 雅之（Enomoto, Masayuki）

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：40515946

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀にゴールドラッシュが生じ、多くの移民をひきつけたオーストラリアのヴィクトリア州とニュージーランドのオタゴ州に着目し、そこで行われたアイルランド移民のスポーツ活動を明らかにした。19世紀半ば、これらの地域では、祝祭日の催しの一つとして、アイルランドの民族的な身体的娯楽であるハーリングを行っていた。やがて、ハーリングをプレーするクラブが設立され、競技会が開催される。このように、イギリスの植民地において、アイルランド移民がイギリス近代スポーツの様式を取り入れ、独自の身体的娯楽を近代スポーツ化する様相がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イギリス近代スポーツの世界的な伝播は、主にイギリスのエリート層によって帝国の拡大とともになされた。本研究では、これまで見落とされてきた帝国の周縁の人々であるアイルランド移民のスポーツ活動に着目し、彼らがどのようにイギリス近代スポーツの普及に関わったのかを検討した。彼らは自分たちの民族的な身体的娯楽をイギリス型の様式を取り入れることで近代スポーツ化した。このようにアイルランド移民は、単にイギリス近代スポーツを他の地域で競技するだけでなく、近代的な競技形式の伝播の一翼を担った。

研究成果の概要（英文）： This study reveals the sporting activities of Irish immigrants in Victoria, Australia and Otago, New Zealand, where the gold rush of the 19th century attracted many immigrants. In the mid-nineteenth century, hurling, an Irish national pastime, was one of the festival events in these areas. Eventually, hurling clubs were established, and competitions were held by them. In this way, in the British colonies, Irish immigrants adopted the style of modern British sports and reinvented their own national pastime into modern sports.

研究分野：スポーツ科学

キーワード：近代スポーツ アイルランド移民 ハーリング

1. 研究開始当初の背景

イギリス産の近代スポーツの世界的伝播は、主に、イギリスの軍人、外交関係者、貿易商人、宣教師、教師らによって成し遂げられた。彼らは帝国におけるエリート層で、植民地においても指導的な役割を果たし、植民地運営の過程の中でラグビーやサッカーを組織した。イギリス帝国の地理的な拡大は同時に、イギリス産の近代スポーツを世界各地に普及させた。

一方、アイルランドでは、イギリス近代スポーツの流入に抵抗する形で、1884年にGAA(Gaelic Athletic Association)が組織された。GAAは、ハーリングやゲーリック・フットボールといったこれまでアイルランド各地で行われていた民族的な身体娯楽をアイルランドで近代スポーツ化した。また、反イギリスのナショナリストたちと結びつくことによって、組織を拡大し、アイルランド独自のスポーツ文化を形成した。

GAAが設立される以前の1840年代、アイルランドで大飢饉が発生し、100万人以上が海外に移住した。彼らの多くは、アイルランド文化を強く継承していたアイルランド西部の貧しい人々だった。アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどへと渡った彼らは、移り住んだ土地で、自分たちがアイルランドで行っていた民族的な身体娯楽やイギリス式のスポーツなど、様々なスポーツ活動を行う。

本研究では、オーストラリアとニュージーランドのアイルランド移民のスポーツ活動に注目する。オーストラリアのヴィクトリア州では1850年代、ニュージーランドのオタゴ州では1860年代にそれぞれゴールドラッシュが起こり、人々をひきつけるプル要因となった。また、ヴィクトリア州のメルボルンでは、1858年にオーストラリア式フットボールが誕生し、アイルランド系の人物がその設立に関わっている。このような理由から、特にヴィクトリア州とオタゴ州に着目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀中葉におけるイギリス近代スポーツの伝播の過程の事例を明らかにすることである。イギリス近代スポーツは主にエリート層によって、世界各地で行われるようになるが、本研究では、アイルランド移民という帝国の周縁の人々に着目することで、これまでとは異なるコンテキストから、近代スポーツ史を捉え直すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、1840年代から1880年代までのオーストラリアとニュージーランドへのアイルランド移民の活動について検討した。そのための史料として、オーストラリアに関しては、同時代に書かれた『草創期メルボルンの年代記(*The Chronicles of Early Melbourne, 1832 to 1852*)』とメルボルンで発行された新聞、『エイジ(*Age*)』、『アーガス(*Argus*)』、『ヘラルド(*Herald*)』を用いた。ニュージーランドに関しては、ニュージーランド国立図書館が新聞や雑誌のデジタル化をすすめており、「ペーパーズ・パスト」としてWeb上に公開している(<https://paperspast.natlib.govt.nz>)新聞から、19世紀にオタゴで発行されたものを史料として用いた。

4. 研究成果

本研究では、アイルランド移民のスポーツ活動について、アイルランド独自の競技であるハーリングに着目し、ヴィクトリア州とオタゴ州それぞれの事例について明らかにした。

(1) ヴィクトリア州のハーリング

『草創期メルボルンの年代記』には、1844年と1845年の2つのハーリングの試合の記述があった。このハーリングは、オークリムの日を祝うプロテスタントの人々のパレードを妨害する目的で、アイルランド・カトリックの人々によって企画された。当日、スティックや棍棒を持った人を集め、このパレードの妨害に成功している。つまり、ここで行われたハーリングは、単なるスポーツ活動ではなく、宗派对立のコンテキストの中で行われた。

『エイジ』、『アーガス』、『ヘラルド』のハーリングに関する記事は1860年頃から少しずつみられる。1877年に報道が増えるが、1880年から徐々に減少し、80年代半ばにはほとんど見られなくなる。1876年以前のハーリングの記事は、アイルランド系の互助団体が後援する祝祭日を祝う催しの中で行われた。特に聖パトリックの日の催しでのハーリングは19世紀後半を通して継続的に行われている。1877年から記事が増加するのは、メルボルン・ハー

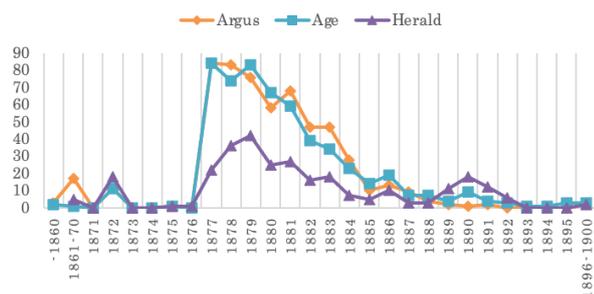


図 ハーリングの記事数の年次推移

リングクラブが結成されたことによる。ハーリングは秋から春にかけて、週末のレクリエーションとして、定期的に練習試合や遠征などが行われている。この頃、ヴィクトリア州の複数のハーリングクラブが集まり、競技規則を統一することを試みている。報道が減少する 80 年代半ば以降は、クラブによるハーリングの記事がみられなくなり、祝祭日の催しのイベントとしてのハーリングが報道される。また、ハーリングがアイルランド産の競技で民族性を指摘するような記事もある。さらに、アイルランドでカトリック教徒のために活動したオコンネルの生誕 100 周年祭やアイルランドでの土地闘争を支援する資金を集める為のハーリングの試合の開催、クラブの名称に土地闘争の指導者であるマイケル・ダヴィットを冠するなど、メルボルンにおけるハーリングとアイルランド・ナショナリズムの結びつきが断片的にみられる。しかし、全体的な報道はカトリック教会やナショナリズムとの関連よりも、週末のスポーツ活動として行われた記録が中心である。これらの活動から、やがてクラブが設立され、組織化された大会が行われるなど、他のイギリス産近代スポーツと同様の形式で日常的に行われるようになる。

(2) オタゴ州のハーリング

19 世紀にオタゴで発行された新聞には、1870 年代、金鉱地で聖パトリックの日のスポーツ大会の一競技としてハーリングが行われた記事がみられる。1880 年代半ばまでは金鉱地を中心として、ハーリングが行われ、それ以降になるとオタゴの州都ダニーデンでの記事が増える。その記事には、アイルランド系のハイバーニアン協会とスコットランド系のカレドニアン協会の協力関係がみられる。また、ダニーデンのハーリングクラブでは、フットボールの選手やクリケットの選手がクラブのメンバーに加わったことや様々な国籍の参加者がいたとの報道がみられた。

(3) ヴィクトリア州とオタゴ州の比較から

1844 年と 1845 年にメルボルンで行われたハーリングは、単なるスポーツ活動ではなくプロテスタントのパレードを妨害するという宗派對立の中で用いられた。1884 年に設立された GAA は、反イギリスの方針を打ち出し、カトリック教会やナショナリストと関連のある組織だったが、1844 年と 1845 年のオークリムの日にメルボルンで行われたハーリングもアイルランド・カトリックの人々を結びつけ、対プロテスタントという社会的対立の意味を含む形で行われた。1870 年代には、クラブが結成され週末のスポーツ活動として行われるようになる。また、1880 年代以降、ハーリングとアイルランド・ナショナリズムを関連づける報道が断片的にみられる。

オタゴ州では、当初、金鉱地での祝祭日の催しの一つとしてハーリングが行われる。その後、ダニーデンが都市化するとともにアイルランド系の移住者が増え、ここでも祝祭日の催しの一つとして行われ、やがて、ハーリングのクラブが設立される。オタゴでは、アイルランド・ナショナリズムやカトリック教会との関連に関する報道はなく、カレドニアン・グラウンドの使用や、様々な国籍の参加者によってハーリングが行われるなど、アイルランド色が非常に強い競技特性から考えると珍しい現象を確認できる。

このように、ゴールドラッシュという同様のプル要因によってアイルランド移民をひきつけたヴィクトリア州とオタゴ州では、アイルランド系移民によってハーリングが行われたが、社会的な意味は異なっていた可能性がある。ハーリングがどのように行われたのかという観点から、両地域のハーリングでは、祝祭日の催しの一つとして行われるようになり、都市でのクラブの設立、週末のスポーツ活動へと、他のイギリス近代スポーツが成立していくのと同様の過程をたどる。このようにアイルランドから離れた地においても、アイルランドの民族的な身体娯楽が、イギリス近代スポーツが普及するのと似た形で近代スポーツ化していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 榎本雅之	4. 巻 424
2. 論文標題 19世紀メルボルンのハーリングに関する研究-the Age, the Argus, the Heraldの記事から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 38-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榎本雅之	4. 巻 424
2. 論文標題 19世紀ニュージーランドにおけるハーリングに関する研究-オタゴで発行された新聞記事から-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 112-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榎本雅之	4. 巻 417
2. 論文標題 『草創期メルボルンの年代記(1835-1852)』にみるハーリング	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 36-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masayuki Enomoto
2. 発表標題 Hurling in Australasia on the 19th Century -Focusing on Victoria and Otago-
3. 学会等名 International Society for the History of Physical Education and Sport（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 榎本雅之
2. 発表標題 19世紀のニュージーランドにおけるハーリングに関する研究-オタゴを中心に-
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎本雅之
2. 発表標題 19世紀のメルボルンの主要紙にみるハーリング
3. 学会等名 日本体育学会第69回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 榎本雅之
2. 発表標題 19世紀中葉にメルボルンで行われたハーリング
3. 学会等名 第68回日本体育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------